

『杜牧詩選』譯注例釋

——凡例・譯注・傳本——

序

筆者は現在、晩唐の著名な詩人杜牧（八〇三〜八五二）に關する譯注書『杜牧詩選』（岩波書店・岩波文庫）——故・松浦友久先生との共著——を執筆中である。本稿は、その中に收める①凡例、②譯注（一首）、③『杜牧集』の主要な傳本〔解説〕の條に收める一項目〕の三種を、松浦先生ゆかりのこの研究誌に發表して、學恩の記念としたい。

『杜牧詩選』は、今日傳存する『杜牧集』の主要な傳本——『樊川文集』『樊川外集』『樊川別集』の三集に收める約四一五首の詩（誤入詩を除く）のなかから、一二九首を嚴選し、「清明」「薔薇花」の二首を加えたものを、主題別に懷古・詠史・行旅・郷思・閨情・贈答・飲酒・閑適・登覽・離

植 木 久 行

別・詠物・書懷の、十二の類別（ジャンル）に分けて譯注を施すものである。さらに「阿房宮賦」一首の譯注を加えて、優れた古典詩人の、「惆悵」たる豊かな抒情世界を生き生きと伝えることを目的とする。

松浦先生とは生前、本書に收めるべき詩賦の選擇と主題別分類をともしに検討し、先生みずから巻頭の「懷古のうた」を飾る「江南春絶句」「揚州」二首の譯注を書かれて、據るべき規範を示された。そして先生は現代語譯、筆者は注釋、という役割分擔を決めてほでない二〇〇二年九月二十六日、突如逝去されたのである。先生の適切・正確な現代語譯と優れた解説（先生は詩風の解説、筆者は傳記の擔當）を讀む樂しみが永遠に失われたのは、痛恨の極みである。分擔執筆を擔う筆者にとって、すでに選録詩の分類を終えていたこと、三首の

詩の譯注の範例が遺稿として殘されたことは、不幸中の幸いであつた。かくして先生の名著『李白詩選』（岩波文庫、一九七七年）の體例に即して執筆する方針が確立したのである。今ここに『杜牧詩選』に收める三種の原案を發表して、早期の刊行を實現したい。

凡例

一、本書は、杜牧の主要な作品一三三首を選び、訓讀・語釋・現代語譯・補注・解説・年表などを加えたものである。

一、底本には、四部叢刊初編集部に收める明後期刊翻宋本の影印『樊川文集』〔本集・文集〕、および當該書に付載する『樊川外集』〔外集〕、『樊川別集』〔別集〕を用いた。これを底本に用いたものに、陳允吉校點本（上海古籍出版社、一九七八年）や歐陽灼校點本（岳麓書社、二〇〇一年）がある。本書の校勘には、①南宋期の注釋者未詳『樊川文集夾注』（中國遼寧省圖書館藏・明正統五年朝鮮刻本の影印本、日本國立公文書館「内閣文庫」藏・無刊記朝鮮刻本の寫眞複製本）、②明萬曆四十六年刊『杜牧集』〔牧集〕（臺灣聯經出版事業公司影印『全唐詩稿本』第五十三冊、杜牧の條に用いられた版本。外集・別集を含む）、③明末・胡震

『杜牧詩選』譯注例釋（植木）

亨『唐音統籤』（戊籤一、北京故宮博物院圖書館藏・上海古籍出版社・二〇〇三年の影印本、國立公文書館所藏本）、④『全唐詩』（中華書局・一九七九年再版排印本）、⑤清・馮集梧『樊川詩集注』〔馮本・馮注〕（上海古籍出版社・一九七八年再版排印本）のほか、唐宋期の總集、⑥晚唐・韋莊編『又玄集』、⑦五代（後蜀）・韋穀編『才調集』（ともに傳瓊琮編『唐人選唐詩新編』〔陝西人民出版社・一九九六年〕所收排印本）、⑧北宋初期の『文苑英華』〔英華〕（中華書局・一九八二年再版影印本）、⑨南宋・周弼編『三體詩』（元の天隱注・季昌增注『三體詩』〔富山房・漢文大系、一九一〇年排印本〕）等を用い、校勘の當該箇所については、「語釋」の部分に注記した。ただし、詩歌の理解を助けるものに限定し、明白な誤字や脫字、簡略化された詩題、異體字の異同（「煙と烟」「憐と恰」「階と堦」等）に關しては、煩雜を恐れて必ずしも一々言及しない。

一、本書を利用する便宜のため、各作品ごとに底本（本集・外集・別集）に收める卷數を、「韻字」の後に（ ）を付して、詩型とともに書き記した。例（七言絕句、本集卷四）。一個人の別集構成を持つ『夾注』『牧集』『全唐詩』『馮本』中の作品の排列は、底本のそれと基本的に同じであ

るが、『唐音統籤』のみは詩型別編成のため、排列を大きく異にする。當該書の重要な異文を記すとき、卷數を特に明示するのは、このためである。

一、漢字については、原題・原文は舊漢字、その他は原則として新漢字を用いた。ただし、「余・餘」「欠・缺」など、誤讀の恐れのある場合は、適宜、舊漢字を用いている。一、かなづかいは、訓讀文を含め、原則としてすべて新かなづかによる。ただし、「出す（出す・出づ）」など、誤讀の恐れのある場合は、適宜、舊かなづかいを併用している。

譯注（一首）

鄭瓊協律

廣文遺韻留樛散

鷄犬圖書共一船

自說江湖不歸事

阻風中酒過年年

もと協律郎の鄭瓊

鄭瓊協律

廣文の遺韻 樛散を留め

鷄犬 圖書 共に一船

自ら説く 江湖より歸らざるの事

風に阻まれ酒に中りて 年年を過ぐと

あなたは、鄭瓊先生ゆずりの、偉大なウドの木の氣質を深く留めなさり、

鷄や犬の家畜も、書物も、すべて一艘の船の中に積み込んで氣ままに暮らしている。

久しく江湖の間を漂泊して歸ろうとしない事由を、みずから言い譯している。

逆風にはばまれ、酒に酔いつぶれているうちに、一年また一年が過ぎていったのだ、と。

○鄭瓊協律―協律は太常寺協律郎。音律の調和をつかさどる官（正八品上）。鄭瓊の事跡は不明。『夾注』に「本注（原注）、廣文の孫子」とあり、『増注三體詩』卷一にも「瓊は乃ち虔の孫」という。『夾注』の「本注」は底本のなかには見えないが、明代（十五世紀半ば）に初修された『臺臨康谷鄭氏宗譜上中下世傳』卷三によれば、鄭瓊は鄭虔の玄孫（虔―或―策―瓊）であり、これは「孫子」（子孫の意）と符合する。しばらくこの玄孫説に従う。明・張之象編『唐詩類苑』卷九七には、「鄭瓊協律に贈る」と題する。○廣文―廣文館博士鄭虔のこと。鄭虔、字は若齊。天寶年間の初め（七四二年ごろ）、協律郎となる。〔新唐書〕

卷二〇二下、文藝傳中)。天寶九載(七五〇)、國子監のなかに廣文館が設置されると、左遷の地から呼びもどされて、その博士となる。杜甫と交遊し、玄宗から「三絶」(詩・書・畫妙絶)と評された(六八五?〜七六四)。晩唐の張彥遠『歴代名畫記』卷九にいう、「鄭虔は高士なり。…飢窮・輒(極度の貧困と不遇)にありても、琴酒・篇詠を好む」と。○遺韻——遺傳された氣質・氣風。○樗散——役立たずの大本。樗はヌルデ、ゴンズイ。節やこぶが多く、枝も曲がりくねって、木材としての使い道がなかった。また散は散木(役に立たない木)の樸(舟を造れば沈み、棺を作れば早く腐り、器を作れば壊れやすく、柱を作れば蟲が食った。『莊子』逍遙遊・人間世篇)。ここは、杜甫の「鄭十八虔の臺州(浙江省)の司戸(參軍)に貶せらるるを送る。…」詩に見える、「鄭公は樗散にして鬢(髻)絲を成す」を踏まえた表現。このため本来「ウドの大本」(役立たずの人間)を意味する「樗散」の語が、ここではかえって一種の反語表現として、不遇や貧困に屈託せず、俗塵を離れて自由な境涯を送る鄭虔の生き方に對する共感が漂う。ちなみに、「樗散」の字、底本・『夾注』・『牧集』には、「櫛散」に誤る。ここでは『三體詩』・『唐音統籤』(卷五六二)等に従う。

『杜牧詩選』譯注例釋(植木)

○江湖——名利の帝都(廟堂)から遠く離れた南方の江湖。自由を樂しむ隱士たちが悠悠自適する空間である。おそらく鄭虔は、すでに協律郎の官をやめており、氣ままな生活を樂しんで再び歸朝する意志のないことをいう。○不歸事——事は事由・原因。○阻風——逆風に邪魔される。江水・世間雙方の風波を兼ねた表現。ちなみに「阻風中酒過年年」の語は、晩唐・五代の韋莊「蓬船に宿る」詩の結句にも見える。本詩の影響か。○中酒——酒に酔う、酒に酔いつぶれる。この「中」は去聲、zhong。結句は鄭虔の高士ぶりを描寫する。

※韻字——船・年(七言絶句、本集卷四)。

〔補注〕

(1) 王晩霞主編『鄭虔研究』(浙江古籍出版社、一九九〇年)に引く宗譜の摘録による。鄭虔の字は「瑩之」と傳える。また鄭虔の事跡は、王晩霞主編『鄭虔研究續集』(浙江古籍出版社、一九九三年)に収める金祖明「唐協律郎鄭虔故里考古」に引く『鄭氏宗譜』等参照。

(2) 植木久行「唐代作家新疑年録(八)」(弘前大學人文學部『文經論叢』第三十卷第三號、一九九五年所收)に収める鄭虔の條参照。

『杜牧集』の主要な傳本

杜牧の甥（杜牧の姉が嫁いだ裴儻の子）にあたる裴延翰は、杜牧の死（大中六年十二月ごろ）後、ほどなく生前の委囑に従って、『樊川集』二十卷（前の四卷が詩（賦を含む）、後の十六卷は文）を編纂し、大中九年（八五五）ごろ、後序を書き終えて完成させた。都長安の東南郊外にある京兆府藍田縣尉・集賢殿校理在任中のことであった。これが、今日傳存する杜牧の詩文集の祖本となる。その後、唐末？、編者未詳『樊川外集』一卷（詩のみ）が編纂され、續いて北宋の熙寧六年（一〇七三）の自序を有する田概編『樊川別集』一卷（詩のみ）が編纂された。かくして『杜牧集』の根幹を成す三種の傳本が全てそろふことになる。ちなみに南宋前期には、さらに編者未詳『樊川續別集』三卷が出現したが、大半の詩は杜牧の友人許渾の詩であった。『全唐詩』卷五二六、杜牧七の條に收める六十二首は、この『續別集』の殘本中の詩らしい。

今日一般に杜牧最良の傳本とされるテキストは、四部叢刊初編に收める『樊川文集』二十卷とそれに付載された『樊川外集』一卷『樊川別集』一卷である。この版本は、早くとも明の正徳・嘉靖年間（十六世紀前中期）以後に刊行された翻

宋本らしい。いわゆる楊氏景蘇園影宋刊本（清・光緒三十二年「一九〇六」楊壽昌刊）や宮内廳書陵部藏・明倣宋刊本は、いずれもこの四部叢刊本と同一の明版であった。

また明末・清初の錢謙益・季振宜遞輯『全唐詩稿本』第五十三冊、杜牧の條に收める刊本『杜牧集』は、明・朱之蕃編『晚唐十二家詩集』（萬曆四十六年「二六一八」刻本）に收める『樊川詩集』『樊川外集』らしい。この『樊川詩集』は、『樊川文集』に收める前四卷の詩を收めたものであり、本來の形態が殘されている。

他方、明の永樂十四年（一四一六）の刊記を持つ朝鮮刻本『樊川文集夾注』四卷（『樊川外集夾注』一卷を付載）が傳存する。この『夾注』本には、さらに明・正統五年（一四四〇）刊本・無刊記本の二種も傳わっており、いずれも朝鮮古刊本である。『夾注』本は、『別集』を缺く宋代流布の一形態（晁公武・陳振孫の著録本参照）を傳えており、卷頭の賦三首も含まれている。南宋の中後期（十三世紀前半）に成立し、注釋者は不明ながら南宋期の中國人らしい。

『夾注』本は、今日傳存する『杜牧集』の版本として最も古いだけでなく、現存最古の注釋書として、初め日本で近年中國でも注目され始めた。明・正統刊本（遼寧省圖書館藏）

が近年（一九九七年）影印⁽²⁾されて、きわめて利用しやすくなった。『夾注』本の存在は、杜牧の詩（以下、杜詩と略稱）に對して詳注を施した『樊川詩集注』（清・嘉慶六年「二八〇二」刊）の著者馮集梧でさえ、全く氣づかなかった稀覯本である。いかえれば、『夾注』は明清期ほとんど未知のテキストであった。従って校勘資料としての價値は極めて高く、本書では、校勘と注釋の雙方で利用した。ちなみに詩の排列は、四部叢刊本とほぼ同じである。

ところで明刊翻宋本『樊川文集』二十卷（特に前四卷の詩の部分）は、晩唐の裴延翰編纂時の舊態をかなりよく保存しているようが、改變された部分も存在する。①本來の書名は『樊川集』であつて、『樊川文集』ではない。この點は、『舊唐書』卷一四七・杜牧傳、『新唐書』卷六〇・藝文志、南宋の晁公武『郡齋讀書志』（單本）卷十八、陳振孫『直齋書錄解題』卷十六を見れば、明白である。②北宋の田概編『樊川別集』の自序によれば、裴延翰編『樊川集』中には、「古律詩二百四十九首」が存在した。しかし明刊翻宋本『樊川文集』に收める詩數は二六七首（卷四に收める唱和詩の相手、殷潛之・邢群の詩各一首を除く）であり、十八首も多く混入している。

『杜牧詩選』譯注例釋（植木）

③『樊川文集』の卷頭を飾る裴延翰「樊川文集序」は本來、卷末に付された「後序」であつた。しかし卷頭の序文が散逸したため、作品集としての體裁を整えるために卷頭に置かれることになり、文脈上不適切な末尾の部分が削除された。北宋・姚鉉^{（3）}『唐文粹』卷九三（四部叢刊本）、『全唐文』卷七五九に收める「樊川文集後序」が、その舊態を傳えている。削除部分によれば、『樊川集』の卷頭には本來、叔父^{（4）}の中書侍郎裴休（裴延翰の父、裴儔の弟）の序文が置かれていた。

明刊翻宋本『樊川文集』には、こうした問題點が存在するが、その中に收める詩文は、ほぼ杜牧の作と考えてよいだろう。（卷四所收の「江上偶見絕句」は、劉禹錫詩の混入である）。

『樊川外集』と『樊川別集』に收める詩に關しては、杜牧の作かどうかを見きわめて、より慎重に對處しなければならぬ。『外集』に收める詩一二七首のうち、すでに二十五首ほどは、杜牧以外の僞詩であり、『別集』に收める詩六十首のうち十二首ほどは僞詩である、と考證⁽⁵⁾されている。

編者未詳『樊川外集』の成立年代は、今日なお明瞭でない。現存の『外集』に收める一二七首は、田概の「別集序」に見える「舊傳の『集外詩』なる者は、又た九十五首」と大きく異なっている。晩唐の詩人皮日休「進士嚴子重（名は儔）を

傷む詩」(咸通十一年「八七〇」の作)の序によれば、彼が幼年時代、郷校で見た『杜舍人牧之集』(中書舍人杜牧「字牧之」の作品集)にあった「進士嚴憚に與うる詩」は、現行の『外集』に收める「嚴憚秀才の落花に和す」詩のことらしい。さらに五代(後蜀)・韋穀編『才調集』卷四には、『外集』に收める三首「隋苑」(定子)「月」「遣懷」(題揚州)と一緒にまとめて収録されていることを考えれば、『外集』は唐末に成立した可能性が高い。しかし現行の『外集』は、すでに當時の舊態をかなり失っている。

いづれにしても現存の『杜牧集』の傳本は、『夾注』本も含めて、明刊本が最古であり、それ以上は遡れない。しかもテキストは少し亂れており、誤收・妄増詩が含まれている。このため杜詩を適切・正確に読んでいくためには、唐末期の總集のなかに收める杜詩の文字に對しても、當然注目する必要がある。この意味で唐末の『又玄集』(光化三年「九〇〇」自序)と五代の『才調集』、および北宋初期の雍熙三年(九八六)に成る『文苑英華』は、特に重要とならう。この三書を採りあげて校勘に利用したゆえんである。

杜詩の注釋書としては、すでに述べたように、南宋の注釋

者未詳『樊川文集夾注』(『外集夾注』一卷を含む)が存在する。續いて清の馮集梧『樊川詩集注』(嘉慶三年「二七九八」自序)が出現し、古典詩に對する優れた注釋書の一つに數えられているが、『外集』や『別集』の作品に對しては注釋を施さない。

近現代になって刊行された杜詩の注釋書のなかで、本書の譯注に利用した主なものをあげておきたい。(研究書・評傳の類は省く)。

【中國】

- ① 繆鉞『杜牧詩選』(人民文學出版社、一九五七年。再版あり)
- ② 周錫鞞『杜牧詩選』(生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八〇年。また廣東人民出版社、一九八四年版もある)
- ③ 朱碧蓮・王淑均『杜牧詩文選注』(上海古籍出版社、一九八二年)
- ④ 朱碧蓮『杜牧選集』(上海古籍出版社、一九九五年)
- ⑤ 吳在慶『杜牧詩文選評』(上海古籍出版社、二〇〇二年)
- ⑥ 張松輝譯注・陳全德校閱『新譯杜牧詩文集』(上下二冊、臺灣三民書局、二〇〇二年)

【日本】

- ① 上村才六『杜樊川絶句詳解』(聲教社、一九三三年)

- ②市野澤寅雄『杜牧』（集英社、一九六五年）
- ③荒井健『杜牧』（筑摩書房、一九七四年）
- ④石川忠久『NHK漢詩をよむ 杜牧』（日本放送出版協會、一九九一年）
- 中國版の①②④は、選録した詩歌を編年部分と未編年部分とに分けて注釋するが、特に②は優れた口語譯を備えている。
- ④は注釋が詳しい。③は平易・明解な注釋書。⑤は編年體形式の簡略な評注書である。⑥は『樊川文集』二十卷のうちの十六卷までの全作品と卷十七以下の「制」六篇、および『文集』未收の詩三十一首の譯注である。つまり⑥は、譯注を施した分量の多さで畫期的な勞作であるが、詩歌の譯注について言えば、必ずしも綿密ではない。
- 日本版の①は、『馮本』所收の絕句一五六首の譯注である。②は日本における最初の大部の譯注書であるが、煩雜で分かりにくい。③のなかに収める約三十首の杜詩の譯注は、現在でも参照に値する。④はラジオ第二放送のテキストであり、平明な評釋を特色とする。
- ちなみに陳貽熾主編『增訂注釋全唐詩』（全五冊、文化藝術出版社、二〇〇一年）の簡潔な注釋（吳在慶執筆）も、充分參考になる。

『杜牧詩選』譯注例釋（植木）

注

- (1) 植木久行「杜牧生卒年論據考——許渾らの没年にも觸れて」『集刊東洋學』第六十八號、一九九二年所收。參照。
- (2) 胡可先「杜牧詩文雜考」(同)『杜牧研究叢稿』人民文學出版社、一九九三年所收)や、吳在慶「杜牧卒年及『杜秋娘詩』系年考辨」(同)『杜牧論稿』廈門大學出版社、一九九一年所收)參照。
- (3) 葛兆光「唐集瑣記」(『文獻』第二十二輯、一九八四年所收)や、この説を受けて探求した胡可先「杜牧研究叢稿」六六頁と二二五頁を參照。『全唐詩』卷五二六は、『全唐詩稿本』のなかで『別集』の後に付載されたテキストに基づく。
- (4) 韓錫鐸「關於『樊川文集夾注』」(『遼寧大學學報』「哲學社會科學版」一九八四年第四期所收)による。
- (5) 山内春夫「杜牧集の版本について」(同)『杜牧の研究』彙文堂書店、一九八五年所收)の説による。
- (6) 明清未刊稿彙編第二輯として、一九七六年に影印された。『全唐詩稿本』の原名は、『唐詩』もしくは『全唐詩』。
- (7) 『杜牧集』の名は、『稿本』所收のテキストの版心による。『文集』『外集』『別集』の詩を、すべて「卷之五」として収める。
- (8) 賈二強『全唐詩稿本』採用唐集考略(陝西師範大學古籍所編『古代文獻研究集林』第三集、陝西師大出版社、一九九

五年所收)の説による。この論文に『樊川別集』の名を記さないのは、單なるケアレスマスか。賈二強の論文の閱讀に關しては、上海の復旦大學に留學中の佐藤浩一氏の手を煩わせた。ここに記して深く感謝したい。

- (9) 許山秀樹「樊川文集夾注」の成立と版本(早稻田大學『中國文學研究』第二十期、一九九四年所收)の説による。この論文は、『夾注』に關する知見を大きく前進させた勞作である。これによれば、最古の永樂刊本の足本は、お茶の水圖書館成篋堂文庫所藏本だけであるという。

- (10) 市野澤寅雄『杜牧』(一九六五年)や荒井健『杜牧』(一九七四年)は、杜詩の最古の注釋書として活用する。

- (11) 注4の韓錫鐸の論文や、吳在慶「朝鮮刻本『樊川文集夾注』的文獻價值」(『唐代文學研究』第九輯、廣西大學出版社、二〇〇二年所收)參照。

- (12) 『朝鮮刻本樊川文集夾注』(中華全國圖書館文獻縮微複製中心、發行者は新華書店北京發行所)。

- (13) 胡可先「杜牧詩眞僞考」(同『杜牧研究叢稿』所收)は、先行の研究成果をまとめた記述を持ち、參照に値する。ただし「懷吳中馮秀才」詩については、筆者は杜牧の詩と見なす。修培基『全唐詩重出誤收考』(陝西人民出版社、一九九六年)も參照。

- (14) 胡可先「杜牧詩文雜考」(注2)のなかでの指摘。

- (15) 古くは明末・胡震亨『唐音統籤』卷五五三(戊籤一)、杜牧小傳の注にいう、「其の外集の詩は、唐人の編む所にして、其(杜牧)の焚棄を更るの余り」と。

- (16) 胡可先「杜牧詩文雜考」(注2)には、こう推測する、——
 現行の『樊川外集』は、後の人が唐代成立の『外集』と『集外詩』一卷(陳振孫『直齋書錄解題』卷十六に見える)あるいは他集とを混合・刪削して作り上げたもの、と。

高麗前期（13世紀半ば頃）に成立し、注釈者は不明ながら朝鮮の学僧らしい。
（芳村弘道「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基礎的考察」『学林』第39号、2004年所収）
宋はこれに訂正。